

## 学生の身体表現

—影との出会い—

秋 田 有希湖

### 1. はじめに

これまでの活動や実践を通じた研究の中で、ダンス経験の有無などに関係なく、感じたことや思い描いたイメージを身体で自由に表現することを自然に行うためには、表現する者自身の心と体がいかに自由であるかが重要であることがわかってきた。このようなことを考えていると、「自分の感じたこと（考えたことも含めて）を身体で自由に表現する、それが舞踊である（…）自由に表現すると云うことは何ものにも制約されないで表現するという意味である。即ちステップとか踊りの型とかにとらわれなくて、又伴奏という名の音楽に依存する事無く、全く自由に動いて表現するということ」<sup>1)</sup> というMary Wigman (1886-1973)の思想を思い出す。表現主義の舞踊について語ろうとするのではないし、ヴィグマンの舞踊理念を幼児教育や保育における身体表現に持ち込もうと意図しているわけでもないが、何ものにもとらわれず、自由に表現することを求めたヴィグマンの思いは、今筆者が身体表現に求める思いと通じると感じたのだ。芸術としての表現を求めているわけではない保育者や養成校の学生を対

象とした活動でも、やはり、多く人が、多くのものにとらわれ過ぎているように感じる。

多数の指導者が既成のイメージや、マンネリ化した身体遊びから解放され、より豊かな身体表現を実践しようと試みているが、保育者や養成校の学生を相手に、「自由に動いて下さい。」と言うだけでは、自由に身体表現をしてもらえない。要するに、身体表現の課題設定を「自由」にするだけでは、活動者は自由になれないということである。特に、保育者養成校の学生は、「自由に」という言葉自体に表現の自由さを拘束される傾向が強いことも経験的にわかってきた。

このように、保育者や養成校の学生自身の身体表現が広がりを知らず、想像力や創造力を十分に発揮できないままだと、現場での保育実践でも、リズムダンスや体操、動物やヒーローなどをモチーフにしたステレオタイプな模倣に留まってしまう。無論、リズムダンス・体操・模倣の重要性は言うまでもない。しかしながら、そこから先に広がる表現の豊かさ・多様さを見逃してしまうとしたら、これほど残念なことはない。そして、指導者となる保育者・養成校の学

1) 邦正美著『メリー・ヴィグマンの芸術と思想』論創社、2000年、p-13

生自身もまた、身体表現指導の困難さを感じているのである。

そこで、活動者がより自由に表現しやすくなるような環境や場、ツールの検討を試みることを開始した。そして、その過程で活動者が新たな身体表現と出会うことを期待したのがこれまでの研究動機である。

本研究は、国立民族学博物館での学際的な共同研究<sup>2)</sup>の実践部分として構想中のインクルーシブな表現ワークショップ(以下WSと略記)にむけた身体表現創出支援のため基礎研究<sup>3)</sup>として始まった。研究を通して、この活動は、年齢や性別・障がいの有無などに関係なく、他者との自発的で自然なかかわりを促すことが示唆された。これら他者との共創的な関係の構築は、保育者にとっても、また保育者を目指す者にとっても、非常に重要な要素と言える。

従って、本稿では研究の対象を保育者養成校の学生に絞り、学生の身体表現の現れや意識について検討を行うこととした。

### 1-1. 影と身体表現

影は、自己の身体と切り離すことのできないものである。つまり、映し出された自己の影は紛れも無く自分自身である。一方で影は、制限された情報しか映し出さない。そこには表情も洋服の色やデザインも無く、ただ自己の身体のかたちがあるだけである。ゆえにイメージや表現を生み出す余白を含むメディアであるということが出来る。そして、複数で影の身体表現を行う際、身体の影同士の「つながり」・「大きさ」・「重なり」といった点で、実際の身

体表現とは異なる特性を有することから、活動者間に実空間では成し得ない新たな関係性や表現をもたらす可能性がある。

そこで本研究では、先行研究で成果を挙げた影の特性を活かした身体的コミュニケーションや共創的な身体表現において、保育者養成校の学生にどのような気づきや発見があるか、また、そのような気づきや発見が専門職でどのように活かされる可能性があるのかについて検討を試みることを目的とした。先行研究の対象であったインクルーシブな活動グループとは異なり、普段から授業や行事等を共にしている学生の身体表現においても、影というメディアを持ち込むことで新たな気づきや発見、或いはこれまでにない身体表現をもたらすのかを検証したい。

尚、「つながり」・「大きさ」・「重なり」という影のはたらきは、WSに向けて影を使った身体表現活動の内容を検討するに当たっておこなった事前研究会によって設定されたものである。

この研究会には、身体表現の研究者や影による表現支援の工学研究者、視覚障害を持つ文化人類学者等20名ほどが参加した。WSの内容を検討する過程で、身体表現の共創を導くキーワードとして設定したものがこの3つである。

## 2. 方法

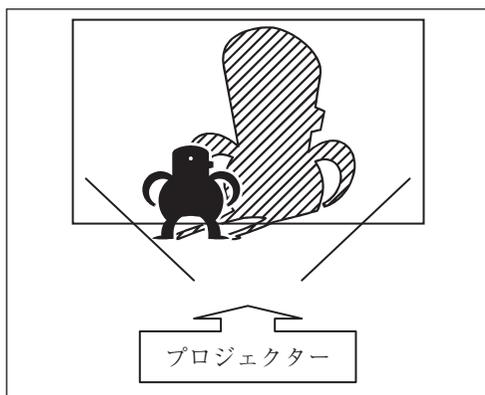
保育者養成校に通う84名の学生を対象に影空間での影身体表現活動をおこなった。活動に際しては、T大学短期大学部(愛知県)幼児教育・保育科の学生62名、T大学

2) 『民族学博物館における表現創出を活用した異文化理解プログラムの開発～多面的な場での“気づきの深化”のデザイン化～』(代表:西洋子)

3) 秋田有希湖・本山益子・西洋子・三輪敬之・高橋うらら・塚本順子『影のはたらきと身体表現Ⅱ～影を介した自己と他者のかかわり～』第61回舞踊学会大会口頭発表(2009)筑波大学

（東京都）児童学科の学生22名の協力を得た。活動の課題は、全く自由な設定で、「全身を使って自由に遊ぶ・表現する」というものである。活動に立ち会った身体表現経験を持つ指導者は、験者として活動の様子を観察した。

影空間は、壁面やカーテン等を1台のプロジェクター光で照らして用意した。（図1参照）また、身体でのコミュニケーションや共創的な身体表現に焦点を当てるため、5～6名の活動者が同時に身体の影響を投影できるような活動空間を準備した。尚、各グループの活動者は、験者が任意に選出したものである。



（図1）活動空間

活動の様子については、1台のステールカメラで記録し、活動者の意識は、活動終了後のアンケート（自由記述）調査によって収集した。そして、験者による観察と、学生によるアンケートの結果を照らし合わせ、実際におこなわれた表現の分析をおこなった。活動実施日や対象などの詳細は次の通りである。

期 日	対 象
2009年11月10日	T大学児童学科 22名
2009年11月12日	本学短期大学部 幼児教育・保育科 62名
2009年11月13日	

### 3. 結果

#### 3-1. 身体表現から

活動の様子を実際の動きから整理すると、次のような特徴が確認された。

まず、活動開始直後は、学生それぞれが自分の身体の影を見ながら、影の映り方や、影の動きと自分の動きとの関連性、或いは差異を確認している姿が捉えられた。（写真1）また、場所を移動して動きながら影を映す姿が確認され、その中で、光源との距離で影の大きさが変わること、他者の影と重なると重なった部分の影の動きが隠れてしまうことなどの影の特性に気づき、自己の影と他者の影との比較も自然と行っているように捉えられた。その際、自己の影と他者の影とが重なることを避ける傾向が見られ、影同士が重ならないように移動する姿も多く捉えられた。



（写真1）

次に、相手の影の動きを見ながらスクリーン上で影同士を触れ合わせたり、つなげたりするなど、横方向での他者とかかわりを積極的に持ち始める姿が捉えられた。この自発的なかわりは、活動開始後間もなく見られるのが特徴的であり、他者や他者の影への関心の高さが伺える。

影同士でのつながりや触れ方には、身体同士を直接接触させてつながったり触れたりするもの（写真2）と、身体を接触させ

ずに影だけで間接的につながったり触れたりするもの(写真3)の2種類が見られた。さらに、間接的なつながりでは、スクリーン上で影のみがつながり合うものと、自己の身体でスクリーンに写った他者の影に触れ合うものの2種類が確認された。このように、影を用いた身体表現の「つながり」は、幾つかのバリエーションを所有することが捉えられた。



(写真2)

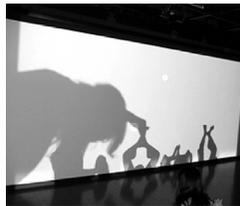


(写真3)

また、影の大きさを調整して通常おこなえないような大胆なかかわりや、影から想起されたイメージの表現を試みるなど、影の世界での表現に没頭する姿も捉えられた。(写真4・5) 例えば写真4は、大きな手が小さな影をつまみ上げるという発想で表現しており、つまみ上げられていている方の身体も、自己の影が、他者によって操作されている大きな手(の影)の動きに合うように同調しているのがわかる。



(写真4)



(写真5)

その後、活動が進み影の存在に慣れてくると、影同士を前後に重ね、他者と一緒に、「みんなで1つの影」を表現する様子が確認された。(写真6) このかわりに見られる他者との位置関係は、活動の始めのう

ちは敬遠されていたものだが、時間の経過と共に自然と現れるようになった。



(写真6)

結果で挙げた身体表現の特徴をまとめると、(1)「大きさ」への気づき、(2)他者との「つながり」、(3)影同士の「重なり」という影のはたらきの3つの特徴を当てはめることができる。本活動の結果から、影を用いた身体表現では、これら3つの要素が身体表現の共創を促すはたらきとして作用していることが改めて確認できた。

影を利用した活動で創出される特有の表現や傾向について、もう少し掘り下げると、次のような点が確認された。

- ①自己の部分的表現(個の表現)からグループ全体でのイメージを喚起する  
…自己の影から得た情報やイメージを他者の影に当てはめることで、自らのイメージを発展させる。また、複数の影で表現を試みることで、一人では見出せなかった影表現が発見され、その形や動きから新たなイメージが喚起される。
- ②影同士で間接的な接触を試みる  
…影同士で相手に触る・掴む・擦る・突き飛ばす・握手をするなど、日常生活で身近に行っている動作や所作、反対に通常身体同士で直接やりにくいことを互いに試みる。その中で、実空間との感覚的な違いを発見し、それを新たな表現創出の刺激とする。

- ③影の大小を利用して，非現実的なストーリーやイメージを喚起する
- …身体の中に入る・身体の影を何かに見立てて物語をつくるなど，身体だけで非現実的・非日常的な表現を見出す。

### 3-2. アンケートから

活動後の質問紙に書かれた感想の中から，多く使われた言葉を抽出する方法をとり，活動者の意識や認識について考察をおこなった。アンケート結果をまとめると（表1）のようになる。

影へのイメージ	非現実性	夢の世界・分身がいる・神秘的・幻想的・平らな世界・世界が変わったみたい・テレビの中・のっぺらぼう・物語の世界 etc. (58)
	違和感	違和感・違う人みたい・変な感じ・不思議 etc. (62)
気づき	大きさの変化	大きさの変化・距離の違い・遠近法・巨人と小人になれる etc. (292)
	間接的なかわりに伴う体感	本当に触れている感じ・リアルで気持ち悪い・本当にあるみたいでかわいい・影でも男同士の（間接）キスは気持ち悪い etc. (19)
影世界での遊び方	大きさの変化を利用	巨人が小人を捕まえる・もぐら叩き・UFO キャッチャー・頭を山に見立てて登る・大きな手に乗る・結婚式・虫捕り etc. (217)
	多様な発想	髪の毛が雨みたい・インギンチャク・戦い・握手・顔を作る…etc.
その他	相反する認識	誰だかわかる／わからないやせてみえる／太ってみえる表情がわかる／わからない実際とは違ってみえる／リアルいつもと違うことがしたくなる／普段目にしているものを再現したくなる

（表1）

映し出された影そのものに抱くイメージでは、「非現実性」と「違和感」に関する記述が多く，影活動での気づきでは、「影の大きさ」や「光源の距離と影の関係」に関する気づきが圧倒的に多く抽出された。影からのイメージ喚起に関しては、「大きさの変化を利用して他者とかわかる」ものが最も多く，その内容も，それ以外のイメージの内容も，具体的なものが多く，非常に多様なものだった。

そのほか、「影同士のつながり」に関する記述も複数抽出され，影を介した身体表現では，間接的なつながりであっても実際に触れたような体感が伴うことが確認された。

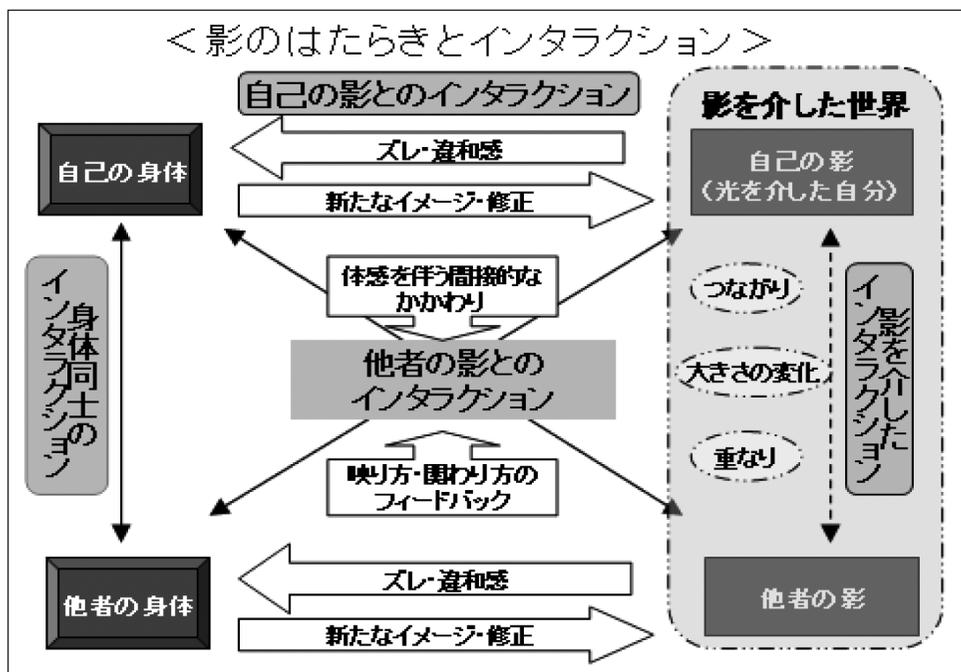
最後に，興味深い点として，同じ活動をしていても，他者と全く逆の認識をしている学生がいることが挙げられる。

## 4. 考察

活動後におこなったアンケート調査の結果を実際の活動と照らし合わせると，基礎研究の結果と同様に，本活動でも，活動者が自分の影・他者の影・他の活動者の身体とそれぞれにインタラクションをおこなう様子が捉えられた（図2<sup>4)</sup>）。

自己の身体と自己の影とのインタラクションでは，自己の影に感じる違和感やズレの意識が確認されるとともに，その感覚から新たなイメージや動きが喚起されたり，違和感やズレの修正を試みたりすることで次のイメージや動きが創出されるなど，自己の身体と自己の影との循環的なインタラクションの存在が捉えられた。違和感やズレの認識は，「困難さ」の意識として捉え

4) 秋田有希湖・本山益子・西洋子・三輪敬之・高橋うらら・塚本順子『影のはたらきと身体表現Ⅱ～影を介した自己と他者のかかわり～』第61回舞踊学会大会口頭発表（2009）筑波大学



られる一方で、実空間では成し得ない新たなイメージや表現を持続的に生み出す重要な要素の一つとなっていることが考察できる。

また、自己の身体と他者の影とのインタラクションでは、自分以外の影を認識することで、影そのものや自己の身体と他者の影とのかかわりがどのように見えるのかを視覚的に捉え、その後の表現にフィードバックしているのではないかと捉えられる。さらに、ここでの関わりでは、間接的なかかわりであるにも関わらず、また、どちらかが動いていない状態であっても、実際に触れ合ったような体感が伴っていることも合わせて確認された。このようなことから、影を介した世界では、影のはたらきが自己の身体と、自己や他者の影との間に生まれるイメージを仲介することで、実空間とは異なるインタラクションを生み出し、新た

な表現を創出する役目を果たしていると考察される。

## 5. まとめ

### 5-1. 自然なインタラクションが生まれた背景

本活動では、自発的な身体表現とインタラクションが活動開始直後から見られる点が最大の特徴であると考察できる。

その背景には、視覚的情報量が制限されていることが考えられ、「保育者としての自信に欠ける」というような保育者養成校の学生に根付く特有の意識を鑑みると、室内が暗いということで個の認識が薄まる点などが、大きな要因であると考えられる。

また、影以外の情報（顔や服装・背景など）が映し出されないことで平等感が生まれ、動きに集中しやすいということも重要な要因と推察される。

次に、自己や他者の身体の形や動き・位置が、スクリーンを見ればわかるというように、認識しやすいことにより、視覚による動きやイメージの照り返しの喚起が可能となっていることが挙げられる。

3つ目の要因として、影に抱く違和感が挙げられる。自己や他者の影に抱く違和感は、イメージや認識とのズレの感覚として想像性・創造性を喚起し、自然なインタラクションを生む要因となると考察される。質問紙に肯定・否定、どちらのニュアンスの言葉でも書かれていたように、この違和感は、活動に困難さを感じる原因となることも捉えられたが、影のはたらきを「使いこなす」段階まで行くことができた活動者からは、「楽しかった」など、逆の感想が取れたことを鑑みると、この「使いこなす」の意識が違和感を困難さとして感じるかどうかを分かつ分岐点になっているのではないかと推察できる。

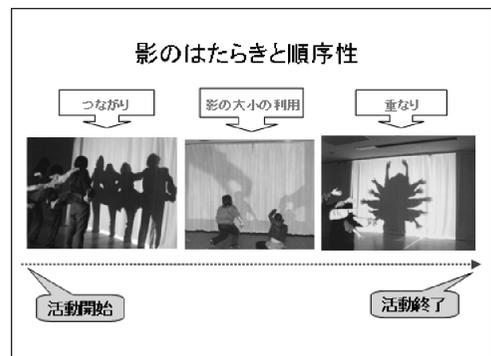
加えて、影から多様なイメージが生まれることや、一つの影に対する捉え方に幅があることも、身体表現そのものを多様化させ新たな表現を生み出す重要なポイントと捉えられる。このことから、同じような活動を通してでも、受け手によって様々なイメージを喚起させる影の特性や、影を介した世界では、生まれるイメージに認識の幅のようなものがあるという可能性が示唆された。

そして、非現実的な表現を生み出す「大きさ」（の変化）、本当にそうだったかのような体感を生じさせる「つながり」・「重なり」も勿論、重要な要素となるはたらきである。本活動を通して、これらのはたらきは、単に影そのものもつ特性というのみに留まらず、活動者が、他の活動者と身

体表現を創出する際に、「大きさを変化させてみよう」とか、「ここでつながってみよう」、「重なったらどうなるかな」など、身体表現創出時の意識（動機）ともなることが確認された。

## 5-2. 表現創出の順序性と学生の意識

加えて、学生がこののはたらきを利用する時の順序性について整理した。すると、こちらも先行研究の結果と同様であることが確認された。（図3）



（図3 作成：秋田）

この順序性には、第1に「自己表現への満足度」が関係していると推察される。3-1でも捉えられたように、自己の影の映り方が確認できたり、納得できたりするまでは、他者と影が重なることを避けること、自己の影との対話に十分満足すると他者への意識が湧き、かかわりへの積極性が生まれていることがこの解釈を裏付けている。第2には、「他者の受容度」が関係していると考えられる。なぜなら、他者の影との重なりが見られたのが活動の後半であったからである。「つながり」の表現は、自己表現に十分満足した後、ようやく他者の影に気づくことで見られる表現と考えられ、自己の影が埋没しないように他者の身体や影とかかわりを持つ段階と捉えられる。そ

の段階を経て、他者の影や表現を受け容れることが出来たとき、初めて「重なり」という表現に気づき、実践することができるのではないかと推察される。他者の影の中に自己の影が隠れてしまっても、自己の表現が失われたわけではなく、共に別の表現を創出しているのだという思考が生まれなくては、「重なり」の表現は紡ぎ出されないのである。

### 5-3. 他者による表現の受容と共創

本活動ですぐに他者との自発的なインタラクションが生まれたことは、表現の創出に欠かせない他者を受容し認める心と身体の準備が出来たことの現れであり、影は、そういった状態を自然に生み出すことのできる要素を備えたメディアであることが確認された。従って、他者との身体コミュニケーションを創出するツールとしての機能も十分に果たすということが確認できた。

自己の表現を認め、さらに他者の表現を認めるという作業は、自己表現や他者理解につながり、保育者としての視点や子どもとのかかわり育む視点として有用にはたらくと考える。身体表現の自由度を高める目的で検討されてきたこれまでのツールを振り返ると、ツールが持つ新奇性が全面に出ているものや個人的な表現を生み出すことが中心となっているものが多かったように感じる。そう言った理由で、様々な人と身体表現を行う際に最も重要な、他者の身体表現理解・受容、そして他者との協働という側面の地ならしは十分にできていなかった可能性が認められる。

その点本活動では、影を介した様々なインタラクションを通して、他者による表現の受容が自然に行われ、表現の共創自体も

一つ高次に進めたのではないかと捉えられた。自分とは異なる他者の表現を認められるようになることで、自己表現にも深みが生まれ、自身の中で再構築された表現のボキャブラリーは、指導の際にも活かされる。誰か（の表現）を受け容れることができたという一つの足跡は、巡り巡って自己表現の受容にもつながる。美しい・かっこいい・正しいなどといった日常のものさしだけに振り回されることなく、思い思いの表現を自然に生み出せる場そのものの構築が表現共創の原点となり原動力となるのである。保育者養成における身体表現では、その下地として他者理解・受容の観点が益々重要視されるだろう。そして、受け止めた表現をどのように導くかが本当の指導力として試されるのである。

本研究は、まだ十分な研究とはいえませんが、今後さらなる議論と実践を重ね、保育者養成や子どもの自由で豊かな身体表現創出に役立てていきたい。